

共通教育のカリキュラム改革における成果と課題に関する研究

— アンケート調査からみる成果と課題 —

小 川 勤

要旨

山口大学では平成25年度から共通教育カリキュラムの改革に取り組んできた。本研究では新しい共通教育に対して実施された3つのアンケートの結果を分析し、カリキュラム改革後3年を経過して明らかになってきたカリキュラム改革の成果と課題、さらに課題に対する解決策を明らかにする。

分析の結果、授業外学習時間、授業への出席率、授業理解度が導入前より有意に向上していること。一方、授業の満足度は導入前より少し低下していること。さらに、授業目標の達成度については変化がなかったことなどが明らかにされる。

さらに、学生がカリキュラム改革に満足している要因は、「バランスの良い科目配置」、「科目選択の不必要なこと」、「科目選択に対する作業負荷の軽減」などであること。一方、教員の不満な要因は、「学生のモチベーションの低下」、「教員の負荷増加」、「大学らしい多様性を体得する機会の減少」、「初習外国語の履修機会の減少」などであることが明らかにされる。

キーワード

新しい共通教育 カリキュラム改革 カリキュラムの定食化 英語特化 クォータ制

1 はじめに

山口大学では平成25年度から共通教育のカリキュラム改革に取り組んできた。新しい共通教育が導入され、本年度（平成27年度）で3年間が経過し、来年度（平成28年度）はすべての学生が新しい共通教育を履修することになる。そこで、3つのアンケート調査の結果から今回の共通教育のカリキュラム改革の成果と課題を明らかにする。また、課題に対する解決策も併せて明らかにする。

2 新しい共通教育の概要

本学が行った共通教育のカリキュラム改革の概要は以下の通りである（図1）。

・専攻分野ごとに異なっていた共通教育の修得

単位数を見直し、全ての入学生が同じ学習到達目標による30単位を共通教育の必修科目として履修する。

- ・本学の教育資源を有効に活用するため、全教員出動体制から全学部出動体制とする。すなわち、共通教育に対して、各学部が科目を提供する形となる。
- ・外国語教育は、世界的共通言語である英語のみを必修とする（英語特化）。
- ・異文化・多文化理解の基盤として、地域を知る授業として「山口と世界」を新設する。
- ・キャリア教育科目を必修とする。1年次には「知の広場」、3年次（高年次の共通教育科目）には、「キャリア教育」を必修科目として全学生に受講させる。

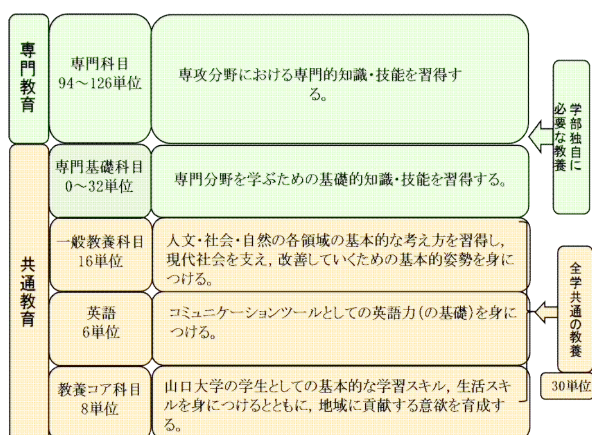


図 1 共通教育カリキュラム改革の概要

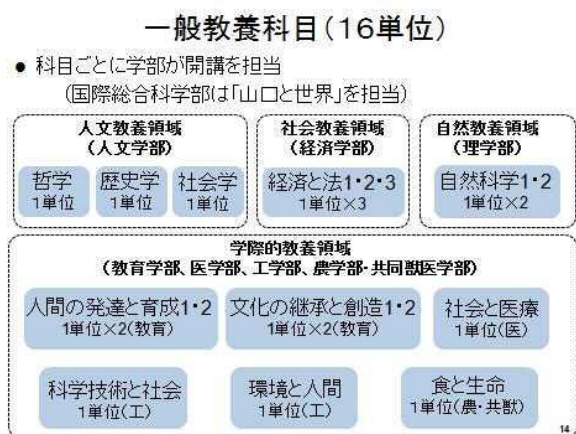


図 2 一般教養科目 (各学部が担当)

- 共通教育の実施に当たって、非常勤講師の雇用を極力抑制する。
- 大学教育センターは、共通教育の実施・運営全般に責任を持ち、これを掌理・統括する。
- 各学部（実施責任部局）は、担当する領域（授業科目）について、学習目標を達成できる内容の授業計画を構築し、全学から担当教員を選任する。担当教員の調整は、大学教育機構が行う。

3 本研究の概要

(1) 調査方法

本研究では毎年実施している学生による授業評価アンケート調査¹（以下、授業評価）と、表1のように平成26年10月および11月に

実施した全学の教員（388名：全教員の35%）および学生（1,264名：2年次（平成25年度に共通教育を履修した学生））を対象に実施された共通教育カリキュラム改革に関するアンケート調査（以下、大学調査）と、筆者が平成25年度から3年間にわたって、共通教育科目「山口と世界」を履修した学生（1年次：3年間合計428名）を対象に行った新しい共通教育に関するアンケート調査²（以下、研究者調査）の3つのアンケート調査の結果をもとに分析を行った。

表 1 調査概要

	大学調査	研究者調査
調査対象者 および調査人数	教員388名(35.7%) 学生1,264名(2年次生(平成25年度共通教育を履修した学生を対象):63.1%)	学生 1年次生 平成25年度:73名(男子32名 女子39名 不明2名) 平成26年度:169名(男子81名 女子85名 不明3名) 平成27年度:186名(男子105名 女子81名)
調査時期	平成26年10月14日(火)~ 11月21日(金)	平成25年度:平成25年10月 平成26年度:平成26年10月 平成27年度:平成27年11月
調査対象者の 詳細	教員:人文13名、教育52名、 経済20名、理24名、医164名、 工62名、農11名、共同獣医7 名、その他(機構、研究所 等)33名 学生:人文103名、教育110 名、経済157名、理213名、医 166名、工440名、農72名、	学生:理系学部(理学部・農学 部・共同獣医・医学部)学生等が 対象

4 アンケート結果

(1) 学生による授業評価アンケート調査からみた共通教育カリキュラム改革前後の変化

学生による授業評価アンケートの内、共通評価5項目（授業満足度・授業外学習時間・授業出席率・教育目標達成度・授業理解度）について、共通教育カリキュラム改革導入前後の変化を分析した。

a. カリキュラム改革前後の「満足度」の

変化

カリキュラム改革後の満足度は、平成25（2013）年度は、導入前より0.07ポイント下がっている。平成26（2014）年度もさらに0.03ポイント下がっている（図3）。

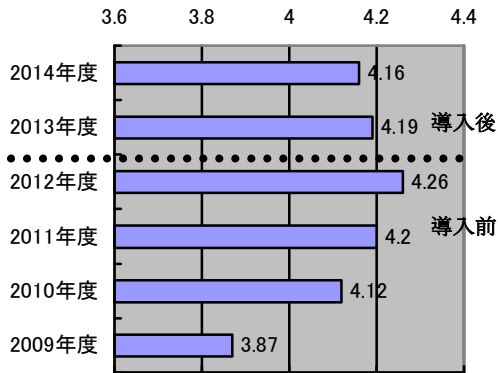


図 3 満足度（共通教育）の経年変化

b. カリキュラム改革前後の「授業外学習時間」の変化

授業外学習時間は、カリキュラム改革後は、0.11ポイントと、大きく伸びていることが確認された（図4）。

なお、表中の数値は平均値を表し、3時間程度または以上を5点、30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出している。

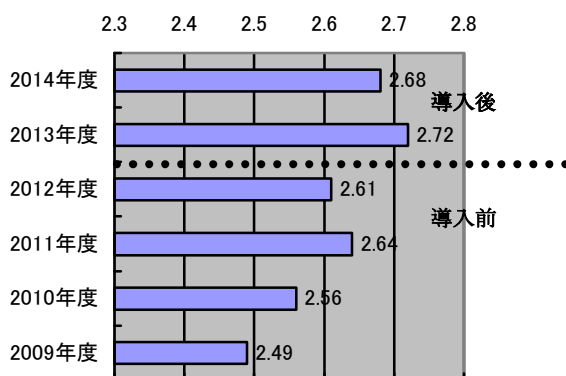


図 4 授業外学習時間の変化

c. カリキュラム改革前後の「出席率」の変化

出席率は、カリキュラム改革後は、0.08ポ

イントと、かなり大きく伸びていることが確認された（図5）。

なお、表中の数値は授業への90%以上の出席率を5点、40%未満の出席率を1として計算を行い、平均点を算出したものである。

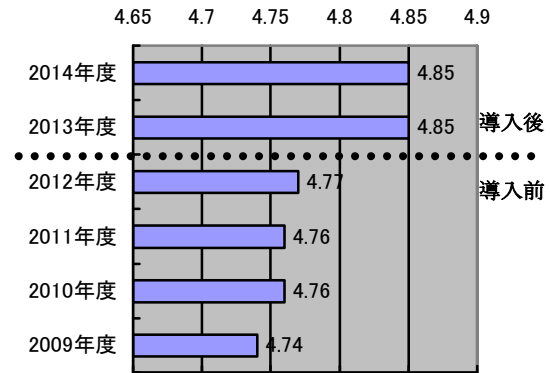


図 5 出席率の変化

d. カリキュラム改革前後の「授業目標達成度」の変化

授業目標の達成度は、カリキュラム改革前後で0.02ポイントと大きな変化はみられなかった（図6）。

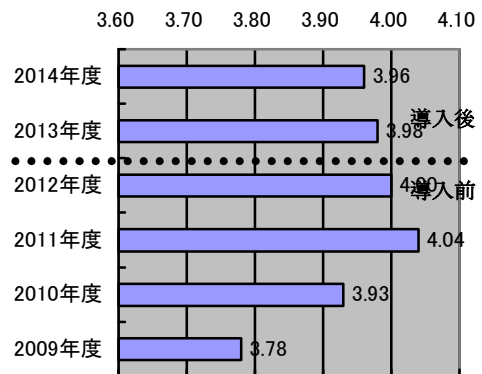


図 6 授業目標達成度の変化

e. カリキュラム改革前後の「授業理解度」の変化

授業理解度は、カリキュラム改革後の平成26（2013）年度・平成27（2014）年度と続いて4.0を超えている。これは多くの学生がカリキュラム改革後の授業理解度の上昇を肯定

的に捉えていることを意味しており、共通教育という大人数の授業が多い中でこのように高い授業理解度であることは喜ばしい状況にあるといえる（図7）。

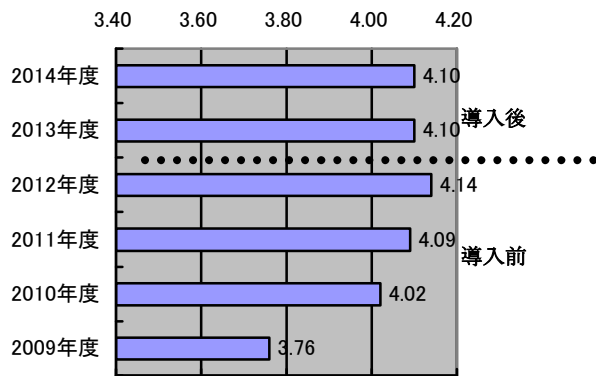


図 7 授業理解度の変化

(2) 大学調査および研究者調査の結果からみた共通教育カリキュラム改革前後の変化

a. カリキュラム改革前後の「満足度」について（大学調査・研究者調査）

大学調査では、共通教育のカリキュラム改革に対する満足度は、学生・教員ともに50%以上を超える者が「どちらともいえない」と回答し、満足度は微妙な結果になった（図8）。

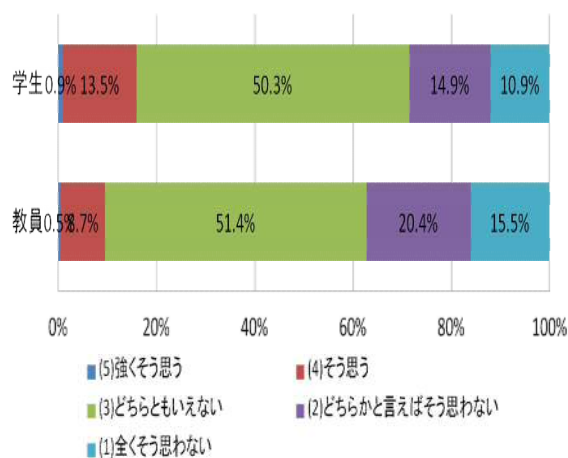


図 8 カリキュラム改革の「満足度」（大学調査）

一方、研究者調査では共通教育のカリキュラム改革に対する満足度を3年間にわたってその変化を分析した。その結果、平成25年度から平成27年度の3年間の満足度の割合（満足している+概ね満足している）は、31.9%（H25）→36.5%（H26）→37.0%（H27）と上昇している一方、不満の割合（あまり満足していない+不満足）は、29.9%（H25）→30.0%（H26）→30.6%（H27）と、ほとんど変化していない。また、「どちらともいえない」の割合は、37.5%（H25）→33.5%（H26）→33.2%（H27）と、平成25年度から平成26年度にかけて4.0%と低下したが、その後は変化していない（表2）。

表 2 満足度の経年変化

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(5)満足している	12.5%	11.4%	15.8%	13.5%
(4)概ね満足している	19.4%	25.1%	21.2%	22.5%
(3)どちらともいえない	37.5%	33.5%	33.2%	34.0%
(2)あまり満足していない	26.4%	22.2%	22.8%	23.2%
(1)不満である	4.2%	7.8%	7.1%	6.9%

また、カリキュラム改革に「満足している理由」としては、「バランスよく科目が配置されているから（40.0%）」、「科目選択の必要性がないから（30.5%）」、「科目選択を大学に任せた方が楽だから（16.0%）」の3つの項目を主に挙げている（表3）。

一方、カリキュラム改革に「不満な理由」としては、「自由に科目選択をしたかったから（44.3%）」、「1年次から専門科目を学びたいから（21.6%）」、「学びたい科目を履修できないから（17.8%）」、「科目選択を大学に任せたくないから（11.5%）」の4つの項目が上位を占めている（表4）。

表 3 カリキュラム改革に満足している理由

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(2)バランスよく科目が配置されているから	44.4%	36.8%	41.0%	40.0%
(1)科目選択の必要性がないから	25.0%	29.9%	33.3%	30.5%
(5)科目を選択を大学に任せた方が楽だから	16.7%	18.4%	12.8%	16.0%
(3)科目内容が分からないから	5.6%	9.2%	6.4%	7.5%
(4)どの科目を選択しても変わらないから	2.8%	4.6%	5.1%	4.5%
(6)その他	5.6%	1.1%	1.3%	1.5%

表 4 カリキュラム改革に不満な理由

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(1)自由に科目選択をしたかったから	46.6%	49.3%	37.7%	44.3%
(4)1年次から専門科目を学びたいから	12.3%	24.0%	22.9%	21.6%
(2)学びたい科目を履修できないから	20.5%	14.0%	19.4%	17.8%
(5)科目選択を大学に任せたくないから	17.8%	8.7%	10.9%	11.5%
(6)その他	1.4%	2.7%	6.3%	4.1%
(3)高校の復習をしたいから	1.4%	1.3%	2.9%	0.8%

b. クォータ制および時間割編成のためのクラス選択の抽選について（大学調査・研究者調査）

クォータ制に関しては、大学調査では、クォータ制の満足度の割合（「非常によい」＋「よい」）は、学生では43.0%であるが、教員は26.2%と低い割合になっている。特に教員は「どちらともいえない」と回答した割合が47.6%であり、不満が満足を上回る結果になった（図9）。

一方、カリキュラム改革の結果、時間割編成のためにクラス選択を抽選で実施しなくなってきた。特にクォータ1（4~6月）では「クラス指定」となっている。このことに対して学生はどのように考えているかを質問した結果、「満足している＋概ね満足している」の割合は41.4%となっている。

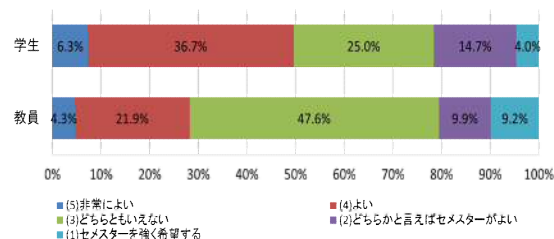


図 9 クォータ制に関する満足度

一方、「不満である＋あまり満足していない」の割合は26.8%となっている。また、「どちらともいえない」と回答した割合は、42.3%（H25）→30.7%（H26）→28.7%（H27）と減少している。このことからクラス選択のための抽選制度は徐々に定着してきていることが明らかになった（表5）。

表 5 クラス編成のための抽選制について

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(5)満足している	5.6%	11.0%	13.8%	11.3%
(4)概ね満足している	25.4%	31.9%	30.4%	30.1%
(3)どちらともいえない	42.3%	30.7%	28.7%	31.8%
(2)あまり満足していない	19.7%	18.4%	18.8%	18.8%
(1)不満である	7.0%	8.0%	8.3%	8.0%

c. 必修外国語の英語特化に関する満足度について（大学調査・研究者調査）

大学調査からは必修外国語の英語特化に対する学生の満足度（強くそう思う＋そう思う）の割合は41.1%であるが、教員は39.6%と学生に比べて低い割合になっている。

表 6 必修外国語の英語特化について(大学調査)

	教員	学生
(5)強くそう思う	7.3%	9.5%
(4)そう思う	32.3%	31.6%
(3)どちらともいえない	21.0%	32.5%
(2)できれば、英語以外の外国語を開講して欲しい	26.1%	20.5%
(1)英語以外の外国語科目の開講を強く希望する	13.2%	5.9%

表 7 必修外国語の英語特化について(研究者調査)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(1)このままでよい	30.1%	45.7%	39.3%	40.9%
(4)もっと会話中心の授業を開設すべきだ	24.1%	18.3%	17.3%	19.3%
(3)TOEICスコアを上げる授業がない	18.1%	13.7%	14.8%	15.3%
(5)英語以外の外国語を学ぶ授業を開設すべきだ	19.3%	13.1%	15.8%	15.7%
(2)TOEICスコアをもっと下げるべきだ	4.8%	8.0%	8.2%	7.6%
(6)その他	3.6%	1.1%	4.6%	1.1%

特に教員は「どちらともいえない」と回答した割合が21.0%であり、英語以外の外国語講座を希望する(26.1%)を合わせると不満が満足を上回る結果になった(表6)。一方、学生を対象とした研究者調査では「このままで良い」が40.9%を占めている。「もっと英会話中心の授業を開設すべきだ(19.3%)」、「TOEICスコアアップの授業の開設(15.3%)」など学生は教員以上に英語教育の充実を求めていることが明らかになった。また、「英語以外の外国語を学ぶ授業を開設すべきだ」という意見も一定割合存在する(15.7%) (表7)。

経年比較してみると、平成25年度より平成26年度の方が「このままでよい」の割合が15.6%上昇している。一方で、「英会話中心の授業」や「TOEICスコアアップの授業」の開設を求める割合はそれぞれ5.8%と4.4%減少したが、平成27年度では「このままでよい」の割合が6.4%減少している一方で、「TOEICスコアアップの授業」の講座開設を望む割合が1.1%上昇している(表7)。

d. 成績評価について(研究者調査)

研究者調査では、共通教育の成績評価に対する満足度は、50%以上(57.9%)を超えている。一方、「あまり満足していない」と「不満である」を併せると、17.1%が不満を

持っている。

共通教育の成績評価に対して不満な要因(研究者調査)としては、「同じ科目名でも担当者により成績評価が異なる(33.7%)」、「成績評価基準が不明(28.9%)」、「レポートの課題の採点基準が不明(27.8%)」の3つの要因で不満が多い。

表 8 成績評価に不満な理由

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(3)レポート課題の採点基準が不明だから	31.7%	33.3%	21.7%	27.8%
(2)成績評価基準が分からないから	25.4%	33.3%	27.1%	28.9%
(1)同じ科目名でも担当者により成績評価が異なるから	27.0%	26.3%	42.6%	33.7%
(4)レポート提出で不正行為が行われているから	11.1%	3.0%	5.4%	5.8%
(5)その他	4.8%	4.0%	3.1%	3.8%

経年比較でみると、平成25年度より平成26年度の方が「レポートの課題の採点基準が不明」、「成績評価基準が不明」で不満が上昇したが、平成27年度には減少してきている(表8)。「同じ科目名でも担当者により成績評価が異なる」不満は、平成26年度には0.7%減少したが、平成27年度には16.3%と急激な増加を示している(表8)。

e. 教育方法について(研究者調査)

授業担当者の教育方法に対する不満を分析した結果、「講義中心で工夫が足りない(33.7%)」、「教員中心で面白くない(23.2%)」、「プレゼンの方法が上手くない(18.7%)」、「学生参加の授業を増やすべき(12.6%)」の順で不満が多い。

経年比較でみると、「講義中心で工夫が足りない(5.6%増)」、「教員中心で面白くない(1.6%増)」などの不満が平成25年度より平成26年度の方が増加している一方、「プレゼンの方法が上手くない(5.6%減)」、「学生の発表や討論の場を増やすべき(3.5%減)」

表9 教育方法に対する不満理由

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(1)講義中心で工夫が足りない	26.5%	32.1%	36.1%	33.7%
(4)教員中心で面白くない	22.5%	24.1%	20.8%	23.2%
(2)プレゼンの方法が上手くない	20.6%	15.0%	19.8%	18.7%
(3)学生参加型授業を増やすべきである	13.7%	14.4%	9.4%	12.6%
(6)その他	7.8%	9.1%	5.9%	7.8%
(5)学生の発表や討論の場を増やすべき	8.8%	5.3%	7.9%	4.0%

などの不満が減少している。「講義中心で工夫が足りない」という不満は、平成27年度も増加している。その一方で、「学生参加型授業を増やすべきである」という不満は年々減少してきている。

f. 今後、共通教育カリキュラムをどのように改善すべきかについて(研究者調査)

今後、共通教育のカリキュラムをどのように改善すべきかを聞いたところ、「もう少し科目選択の幅を広げるべきだ (33.5%)」、「従来の選択科目中心のカリキュラムに戻すべき (20.5%)」、「成績評価基準を統一すべき (14.9%)」の順で改善を望んでいることが明らかになった。一方、「このままでよい (20.0%)」というように現状維持を求める声もある。

経年比較してみると、「このままでよい」と現状維持を求める割合が、10.5% (H25) →21.8% (H26) →22.0% (H27) と毎年上昇してきている (表10)。

一方、「もう少し科目選択の幅を増やすべき」の割合は、35.8% (H25) →34.0% (H26) →31.5% (H27) と比較的高い割合であるが毎年その割合は減少してきている。「従来の選択科目中心のカリキュラムに戻すべき」も同様な傾向を示している (表10)。

表10 今後のカリキュラム改善について

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	全体割合
(3)もう少し科目選択の幅を広げるべきだ	35.8%	34.0%	31.5%	33.5%
(2)従来の選択科目中心のカリキュラムに戻すべきだ	29.5%	19.7%	17.2%	20.5%
(1)このままでよい	10.5%	21.8%	22.0%	20.0%
(4)成績評価基準を統一すべきだ	10.5%	11.2%	19.4%	14.9%
(5)よく分からない	11.6%	10.1%	8.2%	9.6%
(6)その他	2.1%	3.2%	1.7%	1.6%

g. 自由記述の内容

大学調査および研究者調査では、今回の共通教育のカリキュラム改革について学生および教員に自由記述形式で意見を記述してもらった。以下、それぞれの主な意見の内容である。

(学生の意見)

- ・他学部の先生の講義を受講できてよかった。
- ・外国語科目を増やすべきだ。
- ・先生によっては、自分が専門にしていることに話に偏りがちで、一般教養を広く身に付けるということにはなりづらかった。
- ・クォータ制は短いので、様々な分野に触れることができて、あくまでも触れるだけの域であり、記憶に残りにくい。
- ・もっとプレゼンする機会を増やして欲しい。
- ・義務感がかかなりあり、学生が自主性を持って学んでいく意欲を失わされている感じが大きいにある。やらされている授業では面白くない。
- ・「山口と世界」は、先生により内容や成績評価に差があり過ぎる。

(教員の意見)

- ・他学部の専門性に触れるということは、視野が広がり良いことだ。
- ・学生の科目選択の幅が狭くなってきた。
- ・初習外国語を学びにくくなった課題を解決

すべきだ。

- ・科目選択幅を狭めることによって、学生の教育効果を低くする（モチベーションが低い）こともある。
- ・本当に学生のためになっているか疑問だ。
- ・2年次に宇部へ移動することを考慮した仕組みにして欲しい（再履修を含めたしくみやカリキュラム編成をお願いしたい）

5 分析

共通教育のカリキュラム改革については、アンケート結果の分析により、次のことが明らかになった。

- ① 共通教育のカリキュラム改革に対する満足度は50%以上を超える学生・教員ともに「どちらともいえない」と回答し、不満が満足を上回る結果になり、まだ実質的な成果を把握するには一定の時間が必要であることがわかった。
- ② 共通教育のカリキュラム改革の認知が広まった結果、「バランスの良い科目配置」、「科目選択の必要性」、「科目選択に対する作業負荷の軽減」などの今回のカリキュラム改革の利点を理解するようになった。
- ③ 学生のカリキュラム改革に対する不満理由は、「科目選択の自由度の減少」や「専門科目の履修機会の減少」が上位を占めている。
- ④ 教員のカリキュラム改革に対する不満理由は、「科目選択幅を狭めることによる学生のモチベーションの低下」、「教員の負荷増加」、「大学らしい多様性を体得する機会の減少」、「初習外国語の履修機会の減少」、「浅い教育しかできないクォータ制に対する不満」などが挙げられる。

また、必修外国語の英語特化に対しては、次のような結果が明らかになった。

- ①英語特化の満足度は、学生は高い（41.1%）が、教員は低く（39.6%）、有意に差

がある。教員は英語以外の外国語の開講を希望している割合が高い。

- ②英語特化に対する改善について学生は、「このままで良い」が40.9%を占め現状維持を求めている。さらに、「もっと英会話中心の授業」、「TOEICスコアアップの授業の開設」など教員以上に英語教育の充実を求めている。また、「英語以外の外国語を学ぶ授業を開設すべきだ」という意見もある。

クォータ制およびクォータ制導入に伴うクラス選択への抽選制度の導入については、次のようなことが明らかになった。

- ①クォータ制の満足度（「非常によい」＋「よい」）は、学生は高く（43.0%）、教員は低く（26.2%）、有意に差がある。
- ②教員はクォータ制という浅く、概論的な教育内容に対して不満を持っている。
- ③クォータ制導入に伴うクラス選択のための抽選制度については、徐々に定着してきている。

成績評価については、次のことが明らかになった。

- ①共通教育の成績評価に対する満足度は、50%以上（57.9%）を超えている。
- ②共通教育の成績評価に対する不満は、「同じ科目名でも担当者により成績評価が異なる（33.7%）」、「成績評価基準が不明（28.9%）」、「レポートの課題の採点基準が不明（27.8%）」の順で不満が多い。

教育方法については、次のことが明らかになった。

- ①「講義中心で工夫が足りない」、「教員中心で面白くない」、「プレゼンの方法が上手くない」、「学生参加の授業を増やすべき」の順で不満が多い。

今後の共通教育のカリキュラム改善で望むことは「科目選択幅の拡大」、「成績評価基準の統一」を求める要望が多い。その一方で、「このままでよい（18.0%）」というように

現状維持を求める声もある。また、一部の意見であるが、「従来の選択科目中心のカリキュラムに戻すべき」という意見もある。

6 課題に対する解決策について

上記5の分析結果から今回の共通教育のカリキュラム改革については、以下に挙げる課題が明確になった。そこで、それらの課題解決のために大学教育センターを中心に、次のような対応策を考えるとともに、一部の対応策はすでに実施している。

a. 「科目選択幅拡大」問題

新しい共通教育の中に「教養展開系列」を設け、その中に、「国際展開（グローバル人材のための日本企業文化理解講座等）」「地域展開（ボランティア教育等）」「知財展開（ものづくりと知的財産等）」各分野を設置し、関連する科目を開設して学生に自由に履修させるようにカリキュラムを改善した。

b. 「初習外国語」問題

初習外国語に関しては、アジア世界重視の日本の立場からは確かに中国語やハングルなどのアジア系の言語学習を共通教育から外したことは問題があると考えている。そこで、現在、新しい共通教育の「教養展開系列」の「国際展開」分野の中に、新たに「中国語」、「ハングル」等の初習外国語科目を開設する予定となっている。また、経済学部専門基礎科目群の中で自学部生向きに開講されている初習外国語科目を他学部にも開放してもらい履修できるように依頼し、実際に実施されている。

c. 「成績評価基準」問題

「山口と世界」などのアクティブラーニング系科目では、成績評価が教員により異なる傾向がある。そこで「ルーブリック評価」などを導入し、授業担当者を対象としたFD研修会を通じて、成績評価基準の明確化・客観化の向上に努めている。

d. 「英語力向上」問題

新しい共通教育の中の「教養展開系列」の「国際展開」分野の中に、新たに、「TOEIC600-730」、「TOEFL」等を開設して、アドバンスな英語教育を実施する予定になっている。

また、共通教育における英語教育のカリキュラムを見直す作業が英語部会を中心に実施されている。従来、TOEICスコアが高い学生には共通教育の英語の単位認定を行っていた。その結果、1年次に英語教育を受講する機会が実質少なかった。そこで、TOEICスコアが高い学生にもさらに英語力のレベルアップを目指してもらうための科目の開設を含むカリキュラムの見直し作業が進められている。

e. 「単位未修得者」問題

1年次に共通教育の単位を修得できなかった学生に対して、夏季および春季の長期休業中に「集中講義形式」の「再履修クラス」を開設する。

f. 「クォータ制」問題

クォーター（8回）の授業では十分教育内容を教えられないという指摘に対して、クォータで授業を行う際には基本的には何を教えるのではなく、何ができるようになったのかを中心に授業設計（授業デザイン）をしてほしいことを授業担当の先生方に依頼している。そのために、FD活動を充実する。

g. 「学生のモチベーション低下」問題

今までの学生の科目選択が自分の将来像やキャリアを意識して科目履修していたのかどうかは疑問である。また、果たして旧来の履修方法を行った結果、どのような教育効果があったのかを統計データがあまりないため挙証することは難しい。従来の共通教育のカリキュラムでも必修科目の部分は、クラス指定で実施している。今回のカリキュラム改革の背景に確かに大学経営の効率性を求めていることは否定できないが、すでに定食メニュー方式の共通教育カリキュラム改革が実施されているので今後は中身をどのように改善する

のかを各教員に考えてもらうようなFD活動を充実させる。

h. 「宇部地区における再履修クラス開講」問題

さまざま事情で共通教育の単位修得が未修得の学生が毎年一定割合存在する。e. 「単位未修得者」問題でも取り上げたが、現在、長期休業中に再履修クラスを設定して対応しているが、2年次以降に宇部地区で学ぶ学生は共通教育の単位を落とした場合、1日かけて山口キャンパスに移動して単位を修得する必要があった。このため、遠隔授業システムを利用した授業や一部の共通教育科目は宇部地区で開講するなどの対応策を考えている。

7 まとめ

今回の3つのアンケート調査の結果から、共通教育のカリキュラム改革の以下のような成果と課題がある程度明らかになってきた。

成果としては、授業外学習時間、授業への出席率、授業理解度がカリキュラム改革以前より有意に向上していることが明らかになった。この背景にはクォータ制導入に伴ってレポート課題の提出機会の増加や履修のための出席条件の厳しさなどがあると考えられる。また、アクティブラーニングの導入により学生の主体的な学びの機会が増加していることを現しているといえる。

また、必修外国語の英語特化に関しては、学生はもっと英語教育の充実を大学に求めていることがアンケート調査の結果から明らかになった。これはグローバル社会の到来を見据えて英語力の向上が就活や今後の社会人生活をおくる上で欠かせない資質能力であるという意識が高いことが背景にあると考えられる。さらに、学生がカリキュラム改革に満足している要因として、「バランスの良い科目配置」などを挙げていることは、従来の選択科目を中心とする履修方法が必ずしも学生自らの将来像やキャリア形成をもとに実施させ

てこなかったことを現している。

課題としては、授業の満足度は導入前より少し低下していること。さらに、授業目標の達成度については変化がなかったことなどが挙げられる。この背景には、学生にとっては、科目選択の自由度の減少や英語以外の外国語学習の機会の減少、教員の教育内容や教育方法に対する不満などが背景にあると考えられる。教員も学生のモチベーションの低下、大学らしい多様性を体得する機会の減少、初習外国語の履修機会の減少などの不満が背景にある。

これらの課題に対して、本稿の「6 課題に対する解決策について」でその後のカリキュラム改善の様子や単位未修得者に対する対応策を示した。

以上のように、共通教育のカリキュラム改革は導入とともに改善も同時進めていくという形で推進されている。本稿でも示したように、今後、共通教育のカリキュラムをどのように改善すべきかを聞いたところ、「もう少し科目選択の幅を広げるべきだ」、「成績評価基準を統一すべきだ」という改善意見がある一方で、「このままでよい」というように現状維持を求める割合が毎年上昇してきている。したがって、カリキュラム改革は徐々に定着しつつあることを示しているといえる。今後は、学生や教員からの意見を聞きながら、さらにカリキュラム改善等を進めている必要があると感じている。

(大学教育センター副センター長・教授)

【謝辞】

本稿を執筆するに当たり、アンケート調査に協力していただいた学生や先生方に、あらためて感謝申し上げます。

【注】

1. 山口大学大学教育センターのホームページの以下のURLにある平成25年度FD報告書（2014年6月）および平成26年度FD報告書を参照した。

http://www.epc.yamaguchi-u.ac.jp/FD_reports.html

2. 本アンケート調査は、筆者が平成25年度から平成27年度までに共通教育の「山口と世界」受講生を対象に実施したものである。共通教育のカリキュラム改革に伴って導入された「クォータ制」、「必修外国語教育における英語特化」、「クラス分けのための抽選制」に対する学生の評価を調査するとともに、カリキュラム改革に対する「満足度」、「満足及び不満の理由」、共通教育の「教育方法」や「成績評価」等に対する評価などについてアンケート調査を通して明らかにした。

別質保証の在り方について』, pp21-41, 2010年

- ・中央教育審議会, 「学士課程教育の構築に向けて（答申）」, 2008年
- ・中央教育審議会, 「我が国の高等教育の将来像（答申）」, 文部科学省, 2005年
- ・川嶋太津夫, 「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」, 名古屋高等教育研究第8号, pp173-191, 2008年

【参考文献・資料】

- ・山口大学, 平成26年度FD報告書, 2015年6月
- ・山口大学, 平成25年度FD報告書, 2014年6月
- ・山口大学, 『共通教育カリキュラム改革に関するアンケート調査』, 平成27年5月
- ・矢野 眞和『大学教育の効用』, 桜美林大学・大学アドミニストレーション研究科, 河合塾・リアセックセミナー「動き始めたジェネリックスキルの育成と評価」プレゼン資料
- ・橋本健夫, 「新しい教養教育の一步と課題」, 長崎大学 学長特別補佐大学教育機能開発センター副センター長, 河合塾・リアセックセミナー「動き始めたジェネリックスキルの育成と評価」プレゼン資料
- ・日本学術会議, 『回答 大学教育の分野